

(国語)

「国語科を中心に自分の意見をもち、表現し、 友だちと考えを深め合える子どもを育てる」

大阪市立新北島小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校では、前年度までに「自ら学び、自分の考えや思いをもち、友だちと考えを深める子どもを育てる～全教科・領域で、一人ひとりが学びに参加し、わかる・できる授業を通して～」を研究主題として4年間の研究に取り組んできた。その結果、見えてきた課題が三つある。

一つ目は、授業に参加する前提の基礎基本の定着ができていない子どもがいるということである。特に高学年では、それまでの学びの積み重ねが大切になってくる。低学年からのきめ細かい支援の必要性を感じた。

二つ目は、言語化の難しさである。考えを伝えたいが、どう伝えたらいいのかわからなかったり、どう言語化すればよいかかわからなかったりする子どもが多くいることである。友だちに伝えたり、言葉で考えを表現したりすることの大切さと指導の難しさを感じた。

三つ目は授業づくりである。本時の学習で何を習得させる必要があるのかを、指導者側がぶれずに持つことが大切だということである。教材研究をするときに、子どもの思考の流れを予想し、考えさせたいことに、どのようにたどり着かせるのかを、指導者が意図的に授業を組み立てる必要がある。

2. 研究の趣旨

本校の子どもは、学力経年調査の国語科においては、全学年で市の平均を下回っている。他教科についても、問題の意味が理解できていないと考えられる誤答が多く見られた。このことから、国語力をつけることが総合的な学力の向上につながり、今後の生きる力につながると考えた。

そして、子どもが目的意識をもちながら意欲・関心を持続させて学習に取り組むことができるようになると、子ども主体の楽しい授業になると考えられる。また、対話を通して、自分の考えと友だちの考えを交流し、それぞれの根拠をもとに自己の考えを広げ深めていくことができるようになると、伝え合う力が高まり、その喜びを自覚できると考えられる。そのために、自分の思いや考えを明確な理由をもって、相手にわかりやすく伝える力をつけるための研究に取り組むことにした。

3. 研究の概要

一人ひとりが授業に参加できるようにするために、研究の視点を6つ設定した。

①単元におけるつけたい力の明確化と、言語活動の工夫

②子どもが学びたいと思えるようにするための工夫

③自分の思いや考えを広げたり、深めたりするための手立て

④漢字の習得のための工夫

⑤算数の計算力向上のための工夫

⑥読書活動の充実

先の①～③の3つの視点は授業の中での工夫の視点であり、後の④～⑥の3つの視点は授業に参加するために必要になる基礎学力の向上のための視点である。

①単元におけるつけたい力の明確化と、言語活動の工夫

その単元で身に付けたい力を明確にし、その力をつけるために有効な言語活動を位置づける。また、子どもが主体的に学習できるようにするとともに、言語活動に必要な能力を育てる学習活動を工夫する。

②子どもが学びたいと思えるようにするための工夫

指導者に課題を与えられているのではなく、子どもが主体的に学びたいと思えるようにすることが大切である。自ら、「考えたい」「話したい」と思える授業の流れにするための工夫を図る。

③自分の思いや考えを広げたり、深めたりするための手立て

自分の意見を伝える、友だちの意見を聞くという活動だけで終わるのではなく、友だちの意見を聞いたり、友だちの意見に質問したり、意見の共通点や相違点を考えて話し合いをしていくなど、目的意識を芽生えさせた話し合いや交流の持たせ方の手立てを考える。

④漢字の習得のための工夫

本校の子どもたちは、漢字が読めないことで文が読めず、問題の意味や文章の意味を捉えられなかったり、漢字を書くことができなかったりする状態が見られている。そこで、漢字を読み、書くことができるようになるための工夫として、新北島漢字チャレンジ（漢チャレ）の取り組みをしている。漢字を習う前の1年生では、ひらがなやカタカナ、コグトレ等に取り組んでいる。

⑤算数の計算力向上のための工夫

本校の子どもたちは、中学年や高学年においてもかけ算の九九を覚えていなかったり、繰り上げりのある足し算や繰り下げりのある引き算につまずいていたりする状態が見られている。そこで、計算力向上のための工夫として、計算チャレンジを行う。全学年で統一したファイルを作り、1週間単位で朝や帯タイムの時間に取り組んでいる。

⑥読書活動の充実

子どもが読書に興味を持つような活動に取り組み、子どもの読書習慣をつけることで、子どもの

語彙を増やしたり、文章読解力をつけたりするねらいがある。そのために、本の読み聞かせやアニメーション、放課後等の図書室開放、授業での図書室の活用を行っている。特に、授業では、単元の中に本を使った学びを取り入れて、図書室の活用を増やしていくことで、子どもが本にふれる機会を増やしていくようにしている。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

①単元におけるつけたい力の明確化と、言語活動の工夫

指導者が教材を通してつけたい力を明確にし、児童の実態に合わせて言語活動を設定することで、第一次より単元を通しての最終目標を提示することができた。その結果、子ども自身が学習する必要感を持ち、学習に取り組むことでより意欲的に取り組む姿が見られた。子ども自身が自ら学ぼうとする姿を引き出すことが出来たといえる。

②子どもが学びたいと思えるようにするための工夫

指導者が見本や、不完全な見本を提示したことで、子どもたちが見本に対するより良い方法を提案したり、意見を出し合ったりすることができ、興味をもって取り組むことができた。第二次の学習では、第三次の言語活動に向けての必要な情報や方法に子どもたちが気づき、自ら学ぼうとする姿が見られた。

③自分の思いや考えを広げたり、深めたりするための手立て

単元を貫いた課題を設定し、ジグソー法やペア学習、班学習などの形態を工夫し、交流に取り組んだことで、積極的に友だちと交流したり、他者の意見に触れたりすることができ、自らの考えや意見に活かそうとする姿が見られた。

(2) 今後の課題

①単元におけるつけたい力の明確化と、言語活動の工夫

つけたい力を明確にし、適切な言語活動を設定したことでより意欲的な学習に繋げることができた。今後は、単元で学んだ事柄を活用して、他の教科や生活の中でも活かせるようにしていく必要がある。また、言語活動については、教科横断的な言語活動の工夫を意識していくことも考えられる。

②子どもが学びたいと思えるようにするための工夫

今年度の研究の成果として子どもたちの意欲の向上に言語活動の工夫が挙げられることが分かった。次年度以降も継続的に取り組むことが必要である。また、意欲を持続させるために、毎時間の課題設定の工夫も必要だと考えられる。第三次に設定している言語活動につなぐための、子どもたち自身が必要感を持つことができるような課題設定の工夫や提示の仕方が大切である。

③自分の思いや考えを広げたり、深めたりするための手立て

今年度、様々な学習形態を工夫することで、子どもたち自身が自分の考えを共有する場をもつことができた。しかし、グループや班活動を行う際に子どもたちが交流の仕方を身につけていなかったり、理解できていなかったりする姿が見られた。また、考えを広げたり、深めたりするには至っていない子どもも見られた。さらに、自分の意見を最後までもつことができず、友だちの意見を聞くだけの活動になってしまっている子どもも見られた。より効果的な言語活動にするために、具体的な交流の仕方の提示や意見交流の話型の提示をすることや、子どもが意見を話せるようにするための材料を、指導者が準備しておく必要がある。また、共有の方法については、発表ボードや ICT 教材の活用など、考えを視覚化する方法の工夫に取り組む必要がある。そうすることで、授業の終わりには、考えや意見をもてるようにする環境づくりができるようになる。